

史遊会通信

No.223 号
平成 25 年
8 月 13 日

臨時事務局
042-754-9360
arai-hiroshi@
jcom.home.ne.jp
新井宏

七月講演要旨

天羽英二日記にみる

太平洋戦争開戦時の日本と世界情勢

太田 精一

天羽英二は、開戦直前時の外務次官であった。昭和十六年八月から十月まで第三次近衛内閣の豊田貞次郎外相の下で次官を務めた。

豊田外相は、海軍出身であったことから、次官には、ベテランの外交官である天羽英二が配置されることになったのである。

彼は、昭和八年五月から同十二年四月まで、外務省情報部長を務め、昭和九年四月十八日に満州国を巡る日本の立場を非公式談話として発表した。これが天羽声明として取り上げられ、

国の内外に大きな反響を呼んだ。その内容は次の通りである。

「日本は、満州問題に関し、国際連盟を脱退したが、これは東亜における平和維持の根本義につき日本と連盟との間に大きな意見の相違を見たためである。日本は、諸外国に対して、友好関係の維持増進に努めているのは言うまでもないが、東亜に関する問題については、日本の立場及び使命が列国のそれと一致しないものがあるかもしれない。日本は、東亜におけ

例会のお知らせ

◎ 9月例会

日時 平成25年9月25日(水)

午後6時～8時

会場 目黒区民センター 7階

社会教育館 第2研修室

講演 村上邦治氏

テーマ 出雲国造家の実像

自由執筆者 新井宏・柴田弘武・

瀧澤中の諸氏 締切 9月末日

「出雲国造家の実像」村上邦治

大國主命を祭神とする出雲大社の祭祀は、今日出雲国造千家家が代々奉仕している。古代においては、出雲氏と称し、天照大神の第2子天穗日命を祖始とすることが『記紀』に記載されている。現宮司は84代を数え、皇室に次ぐ家系である。

神話の時代から現代まで、連続と続く出雲国造家を、
1. 古代 出雲国造の起源と杵築の移住
2. 南北朝期 千家・北島両家分裂の史実
3. 幕末・明治期 長州藩とのかわりなどから、その実像に迫っていききたい。

る平和及び秩序維持について東亜諸国と責を分かつべきである。支那の保全及び統一秩序の回復は、日本の最も切望するところだが、それは支那自身の自覚又は努力を待つよりほかに

い。よつて支那がもし他国を利用して日本を排斥し、東亜平和に反する措置に出るとき(例えば武器、軍用飛行機の輸入、軍事教官の雇入れ、政治借款)ことがあつたならば、日本は黙つていられない。また、列国側が、支那に対して共同動作を取らんとするようなことがあつたら、例え名目は、財政的又は技術的援助であるにせよ事実においては、政治的意味を帯びていることは必然である。もし、その形勢が助長されるときは、支那にとつて非常に不幸をきたすのみならず、東亜の安定ひいては日本に対しても重大な結果を及ぼす恐れがある。だから、日本としては、主義としてこれに反対をせざるを得ない。しかし、各国が支那の平和に支障を及ぼさない経済活動をするには無論歓迎するところである」

これに対して米国は、強い反発を示し、中国も呼応し、英国もそれに同調した。

ロシアは、意外と冷静を装つていた。フランスは、国際連盟を擁護しつつ、ある程度日本の立場に理解を示していた。ドイツは、批判的論

調であつたが、米、英の強硬姿勢も自制するよう求めていた。

その他、ベルギー及びカナダは、日本の立場を理解し、比較的好意的な論調であつた。

天羽声明は、満州国の存在が国際的に認知されることを前提として、それ以上の中国への領土的野心はないとするものであつた。だが、満州国が、日本の傀儡政権であることを承知している欧米諸国は、日本の中国への干渉の継続をこの声明から嗅ぎ取つた。

天羽英二は、明治二十年八月十九日徳島県板野郡撫養町(現鳴門市撫養町)に男五人、女三人の八人兄弟の三男として生まれた。生家は、肥料、砂糖、建築資材などを扱う問屋で、煉瓦工場も経営し、広い農地を所有する地主でもあつた。

明治三十三年撫養町立高等小学校卒業、徳島中学入学。神戸高商(現神戸大学)を経て、東京高商(現一橋大学)専攻部領事科を明治四十五年卒業、同年外交官試験に合格した。六百人の受験者中合格者は五人で、そのうち東大が三人、東京高商が二人であつた。

天羽日記は、明治三十九年から始まつて昭和二十三年まで、五千頁を超える膨大なものであ

る。日露戦争以後、欧米列強に伍して覇権国家の道をたどつた日本の外交の歴史を研究するには、まさに一級の資料と言えよう。

昭和十二年四月、天羽英二は外務省情報部長からスイス駐箚公使兼国際連盟帝国日本事務局長に任じられ、同年八月、スイスのベルンに着任した。が、二年後の昭和十四年九月末日付で、イタリア大使となり、同年十一月、ローマに転任している。翌十五年九月六日、三国同盟に反対する天羽大使は、松岡洋石外務大臣によつて任を解かれた。解任直後の昭和十五年九月二十七日、日、独、伊三国同盟がドイツのベルリンで独リツペントロップス外相、伊チアノ外相、大島駐独大使によつて調印された。

天羽英二がスイス赴任のため、日本を發つ直前の昭和十二年七月七日、北京西南郊の蘆溝橋付近で、日本軍と中国軍が衝突、それがもとで日中全面戦争へと戦火が拡大した。

昭和十二年九月十二日、中国は「日本は九カ国条約及び不戦条約に違反した」として国際連盟に提訴。麻薬を中国に持ち込んでいると日本を批難した。

天羽事務局長は「支那の捏造によるもの」と反論、国際的な非難を打ち消すことに奔走し、

成果を上げた。日本は、国際連盟を脱退した後、非政治的問題については、同連盟と協力を続けていたのである。だが、軍の圧力により「連盟への協力を絶つべし」との訓電を受け、日本は完全に国際連盟との関係を絶ち、ますます孤立して行った。

昭和十五年十二月、天羽英二がヨーロッパ、シベリア、満州と回って帰国する頃には、イタリアも参戦、ヨーロッパは、戦場と化し、枢軸国の軍隊が全欧州を蹂躪していた。かろうじて、英国が度重なるロンドンへの空襲に耐え、独に抵抗していたのである。

三国同盟を結んだ日本は、英、仏を支援する米国との関係がますます悪化し、日米開戦は、避けられない事態に追い込まれて行く。

昭和十六年六月、ドイツは、対ソ戦を開始、雪崩を打って、ソ連領内に侵入した。

同年七月、日本は仏印に進駐、南方の資源確保を図り、中国及び欧米との長期戦に備えようとした。

これに対し米国は、伝統的外交政策のモンロー主義を捨て、武器援助法を成立させ、国家非常事態宣言をして、対枢軸国との戦争に備えた。それによって対日外交も強硬姿勢を際立たせ、在米日本資産凍結、石油全面禁輸措置に出た。そんな時、天羽英二は、第三次近衛内閣の豊田外相の次官に就任した。海軍出身の豊田外相

の外交力を補うためであった。

天羽次官は、就任後直ちに「国際情勢に対する日本の対外方針」と題する政策を打ち出した。「日本は、経済封鎖を受け、単独でA B C D包囲網を跳ね返せない。したがって、しばらく中立を守り、国力を保存、後日の有事に備えるほうが得策である。その間ヨーロッパ戦線の交戦国は疲弊し、日本に有利な国際情勢が生まれる」と天羽次官は訴えた。

十月十二日、近衛首相、豊田外相、東條陸相、及川海相、鈴木企画院総裁が集まって、荻窪で会談が行われた。

「豊田外相は、この政策に基づいて日米交渉継続を主張したが、東條陸相は反対、及川海相は首相一任。しかも陸軍、海軍とも戦う自信はなく、軍内部の強硬派に押されてやむなく動いているようであった」と天羽日記は語っている。豊田外相の命令を受けて天羽次官は、十月十四日、東條陸相と直接面談「撤兵問題を譲歩して日米交渉をまとめたらどうか」と勧めた。

すると東條陸相は「撤兵問題は、“軍の心臓だ”と言って譲らず、二時間かけて議論したが、東條陸相から譲歩の言質を取ることが出来なかった。だが、米国との戦いは極力避けたいという意思は感じられた」と記している。

その二日後の十月十六日、近衛内閣は総辞職

した。強硬に日米戦反対を主張すると期待した海軍が、「首相一任」と責任を近衛首相に押し付けたことが、彼の重荷となった。迷惑の外れた公家宰相の弱さが露呈した。一身にかかった重責に耐えきれず、ついに政権を放り出してしまったのである。この時、天羽次官も辞任している。

十月十八日、東條内閣が誕生し、外相には東郷茂徳が就任した。外務省出身の彼は、戦争はやらないと明言した。にもかかわらず陸軍の強硬派を東條が抑えきれず、かつ、海軍の責任逃れのような「首相一任」の態度が、戦争へと一気に突き進むことになった。最早一外相の力では、戦争への流れを堰き止めることはできなかった。

何よりもハルノートに現れた米国の開戦への決意を秘めた対日強硬姿勢は、日本の選択肢を狭め、首脳部に「清水の舞台から飛び下りる」無謀な行動をとらせたと言える。

だが、それも日露戦争後、過度に高揚したナショナリズムの帰結であったかもしれない。

天羽英二も国益の追求に身を挺しているうちに、そのナショナリズムが、軍事力を押し上げ、国家に禍をもたらすほど膨れ上がっていることに気が付いた。

だが、その時すでに日本は、取り返しつかないところまで来てしまっていたのである。

自由執筆

国家危急存亡の秋

少年隊が矢面に立った

千坂 精一

『王政復古』の大号令で、幕府の廃絶、徳川慶喜の將軍職辞任と領地返納が宣告刻された。

慶喜は一時京を離れることにして会津藩主松平容保、桑名藩主松平定敬、老中板倉勝静らと大阪に移った。

これで在京幕臣の憤懣衝突は避けられたかに見えたが、江戸三田の薩摩藩邸を幕臣が焼き討ちするという事件が起こってしまった。

これは西郷隆盛が伊牟田尚平と益満休之助に命じて治安を乱す挑発に乗せられたのであって、そのことを知った在坂の幕臣たちはいきり立ち、慶喜に薩摩征討を迫った。

もはや制止できぬと判断した慶喜は、やむなく蹶起を決断した。

こうして〈鳥羽・伏見の戦い〉が起こり、〈戊申東北戦争〉へと発展していった。

奥羽征討の新政府軍は、東征大総督有栖川宮熾仁親王、参謀西郷隆盛のもと奥羽鎮撫使総督九條道孝、副総督澤為量、参謀黒田了介（清隆）、品

川彌二郎となったが、黒田と品川が〈鎮撫〉のはずが〈討伐〉では話が違ふと辞退したので醍醐忠敬に替わったが、醍醐は公卿なので下参謀に茶坊主上がりの大山格之助（綱良）と漁師上がりの世良修蔵がつけられた。

この世良は参謀の権威を笠に着て粗暴な振舞いが多く、仙臺の伊達慶邦、米澤の上杉齊憲両藩主が『會津藩降服嘆願書』を提出してきたとき、受入れようとした九條総督を抑えて断固反対、飽くまでも朝敵會津藩主松平容保討伐を主張してゆずらなかつた。

世良はたまたま出張中の大山に密書を届けるのを福島藩用人鈴木六太郎に託したとき、鈴木がそれを長楽寺の仙臺藩隊長瀬ノ上主膳に渡ししてしまったことからその『密書』に、「奥羽皆敵と見て逆撃の大策に致し度候」と書かれているのを知った瀬ノ上は激怒して、軍監姉齒武之進に世良の逮捕を命じた。

その夜姉齒は、福島藩士と酒を食らい妓と裸で同衾していた世良を襲つて首を刎ねた。

この事件を契機にして〈奥羽越列藩同盟〉が結成され、東北戦争の火蓋が切られた。

二本松少年隊

奥羽の要衝白河城（福島県白河市）は二本松藩

が預かっていたが、そこへ會津藩から西郷頼母総督、横山主税副総督の青龍隊と朱雀隊が応援に駆け付けて守りを固めた。

攻める新政府軍は総督岩倉具視、参謀板垣退助、伊地知正治の隊であつた。

西郷頼母は応援の奥羽諸藩兵とともに善戦したが、兵力の差は如何ともし難く、ついに支え切れずに五月朔日撤退を余儀なくされた。

新政府軍は六月二十四日に棚倉城（福島県東白河郡棚倉町）を陥とした。

いっぽう平潟港（北茨城市）に上陸した総督四條隆調、参謀渡邊清左衛門の別軍は二十八日に泉陣屋（いわき市）、二十九日に湯長谷陣屋（同）を占領すると、七月十三日に磐城平城（同）をも陥として北上をつづけ、白河で合流すると互いの勝利を祝い合い、

仙臺抜こうか會津をとろうか
明日の朝飯や二本松

泥酔して蛮声を張り上げそう戯れ唄つた。

この新政府軍の威勢に戦意喪失した水戸支藩の守山藩（郡山市）と三春藩（田村郡三春町）は、二十六日に相次いで降服帰順した。

このとき二本松藩は主力が白河や近隣小藩の応援に向いていて手薄だったので、急遽残っている予備軍を召集したが戦力弱体は否めず、やむ

なく藩士の子弟を駆り出して元服まえの十二歳から十四歳の年少者たち三十名ほどで〈少年隊〉を結成した。

現在の小学校六年生から中学校二年生までの子供たちであった。

彼らは二十二歳の砲術指南役木村銃太郎隊長のもと城下南入口の大壇口の防備についた。

戦端が開かれるところが勝敗の分かれ目になった。守る藩兵は寡兵のうえに壮年すぎと少年の形勢不利でありながら少年隊は獅子奮迅の活躍をしたのだが守り切れず、七月二十九日終日の攻防戦で陥とされてしまった。

薩摩藩の記録に「一番の激戦地」と回想され、小隊長野津道貫（後の陸軍大将）は、

「予もいくたの戦場に臨みたるも、真に逃げたのはこの時のみであった」

そう述懐しているし、さらに後年、

討つ人も討たれる人もあわれなり

ともにみくにの民とおもえ

武力闘争の浅はかさを短歌に詠んでいる。

會津藩白虎隊のように広く知られてはいないが、その必死の抵抗は野津小隊長も「本気で逃げた」というのだから奮闘が窺われる。

會津白虎隊

會津藩は新政府軍が躍起になっっていることは承知していたので、徹底抗戦すべくあらかじめ戦闘態勢を整えていた。

・十六歳と十七歳の年少者を『白虎隊』

・十八歳から三十五歳までを『朱雀隊』

・三十六歳から四十九歳までを『青龍隊』

・五十歳以上を『玄武隊』

として、それぞれの大隊を士中、寄合、足輕の家格別にし、さらにそれを中隊に分けた。

これに砲兵、築城、遊撃隊を加えた正規軍が三千、ほかに農兵などの補助兵五千を加えて八千の軍勢であった。

それに旧幕臣や桑名などの諸藩の脱藩士が数千加わっていたのである。

二本松城を陥とした新政府軍は、八月二十日に石筵口から侵攻してきた。

會津藩は翌二十一日に母成峠でこれを迎え撃ったが、アームストロング砲の猛射を浴びて後退したので、新政府軍は追い討ちをかけて猪苗代へ殺到した。

この存亡の秋にあたり白虎隊を代表して安達藤三郎と篠田儀三郎が軍事奉行の家老萱野権兵衛に嘆願書を提出して出陣を乞うたが、萱野は少年隊の心意気は認めながらも戦闘部隊とは認めず却下して出陣を許さなかった。

だが、二十三日に老公容保が瀧澤村に本陣をおくにあたって士中二番隊三十七名が護衛を命じられて出陣した。一番隊のほうは若殿喜徳護衛を命ぜられて城中に残留した。

瀧澤村の本陣に到着した白虎隊士中二番隊は、ちようどそのとき戸ノ口原からの救援要請があつて急遽出動することになった。

この日は朝から小雨が降っていて、午後からは本降りになった。冷たい秋雨である。

夕刻、降り頻る雨の中で激戦が展開された白虎隊は初陣にも拘わらず善戦したが、頼みのフランス製旧式ヤーゲル銃の銃身が焼けてしまつて思うに任せず撤退を余儀なくされた。

彼らは瀧澤山中で兵糧調達に出掛けた隊長日向内記に置き去りにされてしまい、餓えと寒さに耐えて朝を迎えた。

山麓へ降りて新堀の洞門を潜り、飯盛山中腹の辨天神社に辿り着いたときには二十名に減つてしまつていた。

俯瞰する城下は一面燃え盛っていて、とても城へ入れる状況ではなかったたので諦め、

「わがことおわれり」

そう覚悟した二十名は自刃して果てた。

十七歳十名、十六歳九名、ほかに飯沼貞吉は奇蹟的に蘇生して明治を生きた。(了)

自由執筆

アジアでの「日動説」からの覚醒を

隆 恵

この造語「日動説」とは、地動説と天動説を擬似化したものだが、アジアは日本中心に動いているとの日動説の過去の栄光からの覚醒を日本人全体が持つべきであり、「日動説」に対する反語「亜動説」の亜細亜全体が動く中で日本を自覚したい。近年友人と中国や韓国・東南アジア諸国を旅行すると、「日本が一番清潔な国」と思っていたが、道路や家の前にごみが散乱していなくて綺麗な街だ、日本も学ぶ必要がある。」と驚嘆の声が多い。幕末前後に欧米列強の人たちが来日して、欧米人が学ぶ必要があるほどに日本人の清潔好きに驚嘆した事を思い出す。その後の日本の欧米列強に追い付け運動が、アジアのビッグワンの地位を確立する訳だが、正に近年の日本とアジア諸国との関係に当てはまる気がする。

この六月に「富士山」が世界遺産に認定され、外国人観光客の増加を期待する声が多い。これで日本の世界遺産は十七となり、数こそ韓国の世界遺産の十に比較して辛勝に見えるが、その集積度と奥深さは日本の圧勝であり、台湾に至

っては世界遺産条約に未加盟なのでゼロ、仮に加盟していたとしても観光資源は貧弱である。ところが、ここ数年の東アジアでの海外からの観光客数は、一番韓国、二番台湾、三番日本だったようだ。日本が劣後した背景には、日本特有の物価高に加えて長引いた円高、日中・日韓関係の政治的緊張、東北大震災の影響、また中国人の動向の統計への影響は極めて大きいなどがその理由とされている。しかし根本的な問題は、こうした日動説に立脚した要因分析ではなく、亜動説に立った冷静かつ謙虚な分析を行い、次の事柄を絶対的な真理と思ひ込み、近年のアジア諸国の変貌を直視せず、未だに欧米先進国と日本が一流国で、アジア諸国は二流以下と蔑視する固定観念の払拭が必要と思う。

①アジアでの最大最高の観光地が日本であり、且つ治安と衛生も圧倒的優位にあり、アジア諸国は不潔で貧しいとの認識、②海外観光客を常に欧米白人を最大のターゲットとし、アジア諸国全体を不法滞在予備軍と決め付けて、観光ビザ取得を義務付ける長年の鎖国政策、③日本の地理的位置は、対北米を意識すればアジアの表玄関だが、アジア視点に立てば正に極東の僻地との認識、④海外観光客は、旅行社主催の団体客との固定観念に捉われ、近年のネットによるフリー客の激増と言う市場変化を見過ごし、観光案内所や外貨両替店等のインフラ整備

の等閑視、⑤東アジアのハブ空港を韓国の仁川空港に取られて久しいが、にも拘らず全国にミニ国際空港を作り続け、国際空港とは日本人が海外渡航する空港と思ひこんで来た。日本の表玄関とする成田空港も、僅か一・五本の滑走路と離発着を七時から二十二時に制限すると言う世界レベルではローカル空港並のお粗末さ、⑥海外観光客も日本人同様に神社仏閣主体の観光で満足すると誤解し、ショッピングは電化製品の秋葉原やデパートでの陳腐な発想など、こうした日動説に立った諸々の錯誤が重なり、現在のアジアの観光地としての日本の地位は、インドネシア並みの下位レベルにある。この七月の統計で年間一千万人レベルの過去最高の訪日数と報道されたが、このレベルでも所詮未だ下位なのである。

それに引き換え、新興国の韓国の東南アジアへの進出振りは真に目覚ましいものがある。韓国は日本の経済規模の五分の一、人口は二分の一、面積は五分の一に過ぎない小国なのだが、老大国日本の自己中ボケを良い事に、隣国の中国は言うに及ばず、日本の独占市場だった東南アジアにも着実に地歩を築きつつある。韓国は、自国製品の輸出と観光客の誘致のために、国家戦略を立て地道な努力を重ね、Kポップスと韓流ドラマを先駆者とした文化の輸出に成功、仁川空港を世界レベルのハブ空港化して、観光ビザ

を要求しない開国政策を実施し、東南アジアの一般大衆の人気を勝ち得つつある。その象徴的な出来事は、最も親日的であった筈のタイの世論調査で、親近感を持つ外国の一番が韓国で、日本は劣後したと言う事実である。幸いな事に、シンガポールやマレーシアでは日本への好感度が圧勝しているし、またタイの人たちの韓国製品や韓国文化へのファンは多いものの、「韓国人」に対して嫌悪感を持つ人が多い。その理由は、韓国人は積年の日米欧へのコンプレックスの裏返しからか、自国より下位にある東南アジアの人たちへの傲慢不遜な態度が反発を呼んでいる。

そこで、この打開策を述べてみたい。前提として、日本がアジアから最も遠隔地のため飛行時間と航空運賃高の問題、更に日本の世界一とも言える物価高のため、アジアナンバーワンの観光客の誘致策がない事を承知しておく必要がある。

(一)日本のビッグワンのハブ空港として、羽田を飛躍的に拡張する。理由は、都心至近もさることながら二十四時間飛行が可能だからである。この際の東京一極集中のやっかみ論議は、繰り返してはいけない。

(二)日本人は観光と言うと名所旧跡・景勝地の探訪と言う固定観念を持つが、日本の歴史を知らない外国人にとって、飛鳥時代以降の寺社

見物のオンパレードは退屈以外の何物でもない。一般的観光客は、老若男女また子供連れ等々極めて多種多様であり、彼らに世界遺産以外の魅力を提供する必要がある。そこで、グルメ・ナイトショー・ナイトバザール・カジノ等の娯楽施設が重要で、アジアの観光先進国を見習いたい。

(三)フリー客対策として、観光案内所・外貨両替店の増設、また電車・バスのチケット券売機の英語・中国・韓国語化。

(四)日本の映像と音楽の輸出。大衆へのアツピールにはテレビ・ネットと音楽が一番効果的だからである。これまでのアニメ一辺倒ではなくドラマ・Jポップスで各国の若い人のファン作りをする。

(五)マレーシア・インドネシアのイスラム経の信者への対策として、礼拝所の新設と、安心して食事が出来る旅館とレストランの整備が重要である。

アジアの人たちに気軽に遊びに来てもらい、そしてリピート客になってもらう、富裕層だけでなく一般大衆の人たちに日本への親しみを持ってもらう事が、政治と経済の両面で役立つと思う。その意味で現在の安倍首相のASEAN重視の取り組みは、大いに評価すべきで、次は既述の「ガラパゴス」状態の国内の改革である。

十一月討論会について

十一月二十七日の史遊会は恒例により一般討論の日です。七月例会の場でテーマは「海舟と諭吉」と決められました。両人の業績については汗牛充棟只ならぬ多くの著作・評論がなされており、漫然と論議しても実り少ないと思います。

諭吉は明治24年、「瘦せ我慢の説」を書いて海舟を弾劾、反論を求めたが海舟は相手にしませんでした。そこで海舟派は替わって反駁し諭吉派は更に本論を進める、というディベート形式で行う予定です。

勿論海舟派から諭吉派への逆襲もありです。予めどちらに組するか決めておいて下さい。

(司会担当 平山善之)

やっぱり

「君子の器は大きかった」

鯨 游海

孔子の高弟である子貢は「汝は器なり」と孔子にいわれた。これは「君子不器」（君子は器ならず）と照らしてみると、「子貢よ、お前は君子ではない」といわれたのに等しい。古来この二つの章の矛盾について多くの学者が解決を試みたが、何れも失敗した。

子貢は孔子の死後、孔門最高の地位に立ち門弟たちからも尊崇された俊才。「お前は一つの事にしか役立たない融通の利かない人間だ。君子の資格はない」等といわれる筈がない。古今東西の論語学者が誰一人答えられなかったこの難問に私は明解な答えを提出した。

即ち不を打消しではなく大(丕)で訳したのだ。論語の時代丕の字は未だ無い。この字は戦国時代以降に不より分離、独立した。故に論語の丕は丕も含む筈である。不を辞書で引くと打消しの他に大や多の意味もある。シメシメ！だ。君子不器を「君子は大きな器だ」と解釈すれば、万事丸く治まるではないか。

不には大の意味があつたにも拘わらず、論語に出てくる不は全て打消しで訳されている。むしろその方が不自然ではないか。

予て私には解釈がすつきりしない章が他にも幾つか有った。()内は私の新解釈。

子曰、觚不觚。觚哉、觚哉。(大きな觚も)

賓退、必復命曰。賓不顧矣。(度々顧みたら)

蓋有不知而作之者、我無是也。(多く知り)

右の三章を、打消しで訳すと文章の上から理不尽となるが、大で訳すと全てすつきりと合理的な文章となる。私は勝利を確信した。

私はこれらを小論にまとめ二〇〇一年五月同人誌『まんじ80号記念号』に、更に加筆推敲して二〇〇五年二月彩流社『歴史に魅せられて』に発表した。当会の古参会員諸兄にはご記憶の方もおられよう。然し二人の例外を除いて反応は鈍かった。殆んど無視されたのである。おそらく漢文も論語も難解で理解出来ない人が殆どだからだろう。無理からぬ事。

だが例外が二人居た。

一人は九州大学文学部教授合山究先生。もう一人は我が史遊会会員新井宏氏であった。

合山氏は「不を丕(大・多)にとつて読むのは詩経や書経のような古い文献にほぼかぎられていますが、勿論本来の論語にも御説のような通用、混淆があつた可能性のあることは疑いないと思われまます。……真実は確かめようがないのだから

蓋然性を重視し、思い切った解釈をすべきだという立場からすれば、御説が正しい可能性は十分にあります。……」

少なくとも頭から否定はされなかった。

新井氏の場合は「鯨氏が新説を出すくらいだから、広い中国には誰かが同様な説を既に出しているに違いない」と、あれこれと探してくれた結果、今年七月一八日左の報に接した。

「遂に『君子不器』を『君子丕器』とする論文が中国でも出ていることを発見した。湖北大学の胡翼という学者が二〇〇五年一二月に『吉林師範大学々報』に発表した『浅談君子不器』という論文で、既に一九九九年の引用論文が書かれている」とし、更につづけて「鯨さんが『君子丕器説』を初めて知らせてくれたのが二〇〇〇年九月です。当然胡翼の論文より五年も早く、間違いなく先行していたことになる。大したものですよ」と書いてくれた。さあ、面白くなってきた。今後どう展開していくか、今新井宏氏と策を練っている最中であるが、とりあえず拙論を吉林師範大学に送付してみようということになった。

鯨・胡翼の新説が果たして論語二千五百年の歴史に抗して、正しい説Ⅱ定説として定着するやいなや？は今後の展開次第となった。